

歴史は未来の羅針盤



近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」は、当分の間は入館料を無料としています。開館時間は午前9時から午後4時まで、休館日は毎週月・火曜日、休日の翌日、年末年始等になります。ぜひともご来館下さい。『近江日野の歴史』全九巻は「旧山中正吉邸」、教育委員会事務局や各公民館にて一冊四、〇〇〇円で好評発売中です。ぜひお買い求めください。

旧山中正吉邸の庭園

旧山中正吉邸の見所のひとつに、邸内の各所に設けられた日本庭園が挙げられます。なかでも、新座敷の東に面してつくられた広大な庭園は、規模の大きさと景色の素晴らしさの点において傑出しています。

この庭園は、昭和初年の新座敷の建築にあわせて作庭されたもので、内部には各地から集められた奇岩・巨岩、立ち姿の美しい名木、数々の石灯籠などが散りばめられています。重厚なたたずまいのなかにも凛とした風格が備わり、近江日野商人の気品と教養、そして往時の繁栄ぶりが伝わってきます。初春には紅梅が可憐な花をつけ、初夏にはサツキ・ツツジが鮮やかに咲き誇るなど、四季を通じて自然の移ろいを満喫することができます。

西村嘉兵衛の石灯籠

この優美な庭園の中でひととき目を引くのが、茶色味を帯びた花崗岩で作られた奥ノ院型と呼ばれる石灯籠です。比良山麓の南小松（大津市）の名工・西村嘉兵衛の手による石灯籠で、邸内には同型のものが合わせて5基、小型・異型のものが4基すえられています。

比良山系の山裾には良質の花崗岩が大量に埋蔵されていて、古来より石細工が盛んに行われていました。その伝統は古く、千年ほど前に朝鮮半島から来た渡来人が始めたと伝えられています。

比良山系の花崗岩は、白色で荒目のミカゲ石が中心ですが、西村嘉兵衛の持ち山から採れる石は、薄茶色を帯びた独特の風合いを持ち、「糠目」と呼ばれるきめ細やかに石肌の硬い赤石が採れました。その硬さは、「同じ仕事をするのに

三倍の手間がかかる」と職人たちのあいだで囁かれたほどでした。

西村嘉兵衛は三代からなり、初代嘉兵衛（1850-1915）は明治期を中心に活躍し、石灯籠の名工としての基礎を築きました。二代嘉兵衛（1877-1936）は、明治から大正期にかけて活躍し、黄金期を築きました。この頃、石材の魅力を活かした、精緻な装飾が施された作品が数多く生み出されました。その名声は対岸の湖東にまで届き、近江商人たちが競って作品を注文したと言います。山中正吉家の主人もその一人でした。三代嘉兵衛（1908-

1990）は昭和期を中心に活躍しましたが、素材となる赤石が採れなくなってしまうため、西村嘉兵衛の歴史はこの代で幕を閉じることとなりました。

嘉兵衛灯籠には、奥ノ院・春日・蓮花寺・利休・雪見などのさまざまな型がありますが、中でも評価が高いのが奥ノ院型の灯籠です。

旧山中邸にある奥ノ院型石灯籠の多くは、初代・二代の作品と思われる、高くそそり立つ宝珠、請華の見事な姿、火袋を受ける中台の精緻な一二支の彫刻など、その造作には目をみはるものがあります。近代近江を代表する

名工・西村嘉兵衛の技術の粋を集めた逸品をゆつくりとご観覧ください。

【参考】平出直厚「近江の灯籠」(その1)



▲旧山中正吉邸の奥ノ院型嘉兵衛灯籠



▲灯籠部分(右が辰、左が巳)